

自己評価報告書(最終報告)

報告者

現代教育課題総合コース
／小西 正雄

■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 教育大学教員としての授業実践

本学の目的は、豊かな教養と教育実践力をもった教員を養成し、学校現場に送り出すことにある。このことを実現するには、教科専門・教科教育・教職専門等の各分野の授業が、学校現場の実践と関連性が保たれていることが必要である。あなたは、教員養成大学の教員として、本年度はどのような授業計画を立て実現しようとするのか、これまでの取り組み状況を総括し、具体的に示して欲しい。

1. 目標・計画

担当授業科目のうちメインとなる「現代の諸課題と学校教育」Iおよび同IIにおいて、昨年度までの反省ならびに受講生の評価にもとづき、あらたな授業展開、評価制度を試みる。すなわち、授業の最後に次時の内容に関係するキーワードないしキー概念についての受講生のレディネスを問う簡単な問いを出し、用紙に記入させ提出させる。その記載傾向をつかみながら、次時の展開を最終的に決定し、次時の冒頭には、その記載のいくつかを読みながら授業に入る。なお、この提出に関しては、これまでの経験を生かして「ハンドルネーム方式」を採用する。なおレポートはこれまでの3回から2回に減らし、随時受付を指定日受付に変更する。ただし自由レポート提出権は従前通り保障し、その評価は評定の一部に参入する。授業ではできるだけ受講生の席に入り、「黒板を背負う」機会をなるべく少なくするとともに、近隣の席の受講生へのインタビューを基軸として新しい展開を試みる。なお、授業題目は昭和22年度学習指導要領試案にならいうべて疑問文形式とした。

2. 点検・評価

非常に効果をあげたハンドルネーム方式は、前期の反省に基づいて、後期は授業開始時に本名とともに登録させることで、期末の評価を迅速に行うことができた。なお、途中で、自分のハンドルネームを忘れてしまった受講生が2名いたので、このような事態への対処方法が今後の課題として残った。いずれにせよこの方式は、本音を出しあうことができるとともに、授業の雰囲気や和ませる上で効果絶大であった。なお年末に敢行した「レポート集」においても執筆者名はハンドルネームを用いている。

年度目標前半に書いた「授業コメント」方式も、学習内容の理解度の確認ならびに次時への接続を図る上で大いなる効果があった。期末には受講生ごとに、提出された授業コメントをホチキスでとめて返却した。受講生にとっては自身の振り返りカードとして役立てるとができたはずである。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

来年度は今年度に引き続き、コース必修科目である「教育実践フィールド研究」の主担当者を拝命する予定である。今年度の経験を生かし、学生の海外授業補習校に対する実践研究支援により一層具体的に関与する。学生生活支援については、来年度のM2院生4名のうち3名が教員採用試験を受験するので、就職支援室と密接に連携して情報の確実な伝達にたくに留意する。

2. 点検・評価

教育実践フィールド研究は、ゲストティーチャーによる講演ならびに現地訪問も無事完了し、2月末には4月のプレゼン原案も完成した。1昨年度に比べて地味な内容の研究となったが、受講生は驚くほど熱心に作業に取り組んでくれ、指導する側としても満足 of いくものであった。

ゼミ生の進路指導に関しては、23年度修了生3名すべてが4月から教員として活躍してくれている(小学校2名、中学校1名)。

II-2. 研究

1. 目標・計画

メインの授業である「現代の諸課題と学校教育」の講義内容を出版してほしいとの要望が出版社からあったので、一応の章立てをすでに完成している。これに基づき来年度秋を目標に、原稿化を鋭意進め、年度内の出版を期す。また7月に行われる日本国際文化学会において、国語教材に関する研究発表を行う。

2. 点検・評価

メインの授業である「現代の諸課題と学校教育」の講義内容のとりまとめに関しては、上記の雑誌連載が無事終了し、単著出版の準備もほぼ完了した。予定通り3月末には出版社との最終うち合わせにもちこんだ。

日本国際文化学会での研究発表も無事終了した。その内容については上記著書にも収録する。

II-3. 大学運営

1. 目標・計画

大学院教務委員会委員をはじめて拝命したので、先輩諸氏の指導を仰ぎながら、カリキュラム改善等に微力ながら尽力する。

2. 点検・評価

就職委員会委員として面接指導を担当した。指導主事に知己が多いので、彼らから得た情報をもとに実践的な面接指導を行った。広報活動については上記の通り別府大学で後期分を開催し、進路希望学に直接語りかけることができた。教務委員会委員としては、教育実践フィールド研究のあり方について、担当ワーキングのスタッフと協議するなどして、改善の一定の方向を提案することができた。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

教育支援アドバイザー制度にもとづく講師依頼があった場合は, 本務に支障がない限り要請に応える。また, その他地元教育関係機関から講演等の依頼があれば積極的に協力する。国際交流に関しては, ホノルル授業補習校との交流を進める。

2. 点検・評価

アドバイザーの要請はなかったので今年度は実施していない。また附属学校との協力についても, 現代教育課題総合コースという立場上, 現場からの要請がなく, 手持ちぶさたの状態である。

社会貢献としては, 徳島県小学校社会科を語る会のメンバーとして現場の実践研究に協力した。また徳島市教育研究所が開催する研修講座の講師として200名近くの幼小中高特別支援学校の教員を対象として講演を行った。

ホノルル授業補習校との交流については, 2月下旬に再度現地を訪問し授業見学, 情報交換を行い, 24年度の学生訪問について受け入れの依頼を行った。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

以上を縫合的にみて, おおむね当初の目標に準じた貢献ができたものと判断できる。